北星短大紀 *Journal of Hokusei Jr. Col. Vol.29 : 3 − 13 , 1993*

「人生と発達課題－リカレント教育課題と実践」

－1992年度公開講座講義－

山 本 順 子

は じ め に

皆さん、こんにちは。私どもがこのように公開講座を開かせていただいてから11回目を迎えます。毎年テーマを設定しておりますが、今年は「再び自分発見の道を求めて」というテーマで組んでみました。昨年は自己表現ということで「もう一人の私をみつめて」というテーマでたくさんの皆さんに関心を持っていただきました。今年は少しその問題を引きずって「再び自己発見の道を求めて」というテーマを設定したわけです。今日は最初の日ですので、この公開講座全体を通して、どういうことを狙っているのかという点をも踏まえながら、これより２時間お話をさせていただきます。

私は「人生と発達課題」、サブタイトルに「リカレント教育課題と実践」というテーマを設定しました。このテーマは私自身も関心があり、この講義展開に意欲を覚えておりますので、楽しくお話をさせていただけることを感謝しております。

では、プリントにそってお話をさせていただきます。最初に、「はじめに」で、「It's never too late.」ということが書いてあります。実はこの It's never too late. を日本語にどういうふうに訳そうかと思いました。never too late 遅いことはないということですね。さて、日本語を探したわけですが、なかなかいい訳がございません。これを私どもの教授会に出しましたところ、よいという方もいらっしゃいましたけれども、これはちょっとまずいという先生もおられました。何故、まずいのかというと直訳すると今からでも決して遅くはないということですが、なにか成績の悪い学生のお尻を叩くような言葉だと。もう少し発展的な言葉が使えないかという、そういった注文も頂戴したわけですが、生涯教育の問題というのは、本当に人間の誕生から最後まで私どもが生涯教育をどう考えるか、あるいは生涯学習を心得るかということで、人生のどの時期にも当て嵌まることなんですが、やはりこれからお話しますようにこの生涯教育・生涯学習というのはいろいろな意味がありまして、教育を受ける権利の不平等を解消するといった問題やら時代の変化にしたがって、新しい教育課題がある。やはり学校教育以外のところで教育の機会がおおいに与えられなければならないという点がポイントだと思います。そういう意味で決してさぼっている学生のお尻を叩くというよりももっと広範な社会人の皆さんに色々な教育の機会を設定するということがポイントですので、It's never too late. というテーマを中心にして、これは今年だけではございませんで、私どもの学校ではこれからもずっと生涯教育をずっと継続して発展させていきたいと思っているわけで、その時にかかげる言葉が It's never too late. にしようと思っているところです。さて、日本語ですけれども、いろいろと知恵を出し合った結果、「学ぶに時なし」ということにしました。どうぞ皆様も、

この方がいいということがございましたら、頂戴いたしたいと思います。実はこの言葉は私がアメリカに行きましたときに、サンシティ・太陽の町という有名なリタイヤ・現役を退かれたシニアの方だけが住んでいる、そのために開発した町、そこにいったときに、そこの生涯教育の場であるコミュニティスクールで出会った言葉なのです。このサンシティというのは本当に太陽の谷間といわれるアリゾナ州のフェニックス市から入ってゆく町ですが、ウェップという会社が開発した、最初は5万くらいの町なんですね。ここはシニアの方ばかりが住んでいるんですけれども、名前がヤングタウンというんです。確かにその名がふさわしい。シニアの方がホットパンツをはいて軽快なスタイルで一日暇がない。〝時間がなくて困るんだ〟といった活動をしていらっしゃる方ばかりなんですね。私を案内してくださった老婦人は65才でしたけれども、とってもお元気な方で一日1マイルを歩くことにしている、ということで、この町にはゴルフ場が11ありましたし、プール、テニスコートなども何面かあって自動車を組み立てる工場なんかもあるんですね。そこをみて歩きましたら中で自動車を一生懸命組み立てている。これは売るためではなくて自分の趣味で組み立てているんですが、今に日本車に負けない車を作るよとVサインを見せていたお年寄りがいらっしゃいました。さてこの学校なんですが、そこに行きましたら、お爺さんがちょこんとその入り口に座っているんです。人待ち顔で。それで、なんとはなしに話し掛けましたらそのお爺さんはお連れ合いのおばあさんがこのコミュニティスクールでお勉強をして帰るのを待っていたんですね。それで奥さんは何をお勉強していらっしゃるんですかってきいたんです。そうしましたら地質学だよっていうんですね。はっ、地質学。じゃあ、奥さんはずっとそういったお勉強をされた理科系の方なんですか。いやいや普通の主婦だったよ。だけれども夫婦でこの町にずっと住み続けてきてよくよく考えてみたらこの自分たちが住んできた土地の地質について何も知らないことに気が付いた。その地質・土壌についてうちのばあさんは勉強しているんだよとおっしゃるんですね。何の気負いもなく自然にそうおっしゃっているわけなんです。本当に心打たれた思いがしたわけです。でもこのコミュニティスクールも決してちゃちなものではなく、ここにある図書館に通うと博士号が取れるだけの論文を書く資料がここには備えられているということなんですね。決して大学・大学院が、若い人たちに備えられたもの、そういった教育機関ではなくて一般市民にそれだけのものを用意しているということが私は感心して帰ったわけです。よくアメリカではそういったコミュニティスクールが発達している。学校で若い18才の青年たちを教育するのが大学ではないといわれておりますけれども、こんなによく徹底されているとはと、目のあたりにしてきたのが、このIt's never too late. ということだったわけです。この言葉をもって私どももひとつ生涯教育の視点からいろいろな責任を果たさせていただきたいものだというふうに思っているわけです。

古典的生涯教育論

さて、今日のテーマですが、この人生と発達課題に向けて生涯教育がいわれているわけですが、生涯教育論というものがどういう問題をもっているのか。私は今日、皆さんにひとつのポイントをもってまいりました。それはひとつです。古典的な生涯教育論がございます。これからご説明いたしますが。それか

ら今日における、今日的課題に応える生涯教育論がございます。この7月の末にも文部省から生涯教育に関する答申が発表されております。まことに今の問題でもあるわけですが、こういった流れの中で何故生涯教育が唱えられるのかという中で、古典的な教育論もあれば今日的な課題にそった生涯教育論もありますが、しかし、私はそれをこえて今非常に大事な問題、今私たちが自覚しなければならない問題がひとつある。それは学校においても社会においても当て嵌まることでございまして、そのことを私は今日ひとつ申し上げたいと思うのです。そのために生涯教育論が今大事なんだということで縷々今までの経過も述べますけれども、どうかそのひとつのポイントについてお考えいただきたいと思います。でも順序でございますから、まず、古典的な生涯教育論がどんな流れできたのかということをお話をして今日的な課題、そして私が考えているポイントについて触れていきたいと思います。最初にパイディアという言葉をのせてございます。全面的な教養、全人的な教育というふうに書いてありますが、パイディアというのはそれを意味しているわけです。実はこの生涯学習ということはとおくギリシアの時代、アテネで展開されたひとつの教育論が源流になっているかと思います。それはソクラテスとかプラトンに遡るわけですけれども、もうこの時点で社会の現実的な要請に基づく、つまり職業につくための、あるいは専門的な教養、こういうものを越えたところの全面的な教養・全人的な教育というものが必要なんだとということがこのギリシアの時代に人々に語られはじめたわけです。これが中世に引き継がれまして、中世においては、リベラルアーツという言葉で語られるようになったわけです。職業につくためとか、技能の習得に限られないで、全人的な教育が必要である。そのための教育システムというものがリベラルアーツである。これは今日におきましてもリベラルアーツというのは教育システムの中で大事な問題として扱われてます。例えば大学、短大でもそうですけれども専門コースに入る前に一般教育の課程がございます。あるいは教養という課程があるわけですけれども、この一般教育において専門分化された教養、それぞれの専門教育に入る以前にこのリベラルアーツが学生に教育のひとつの課題として組み込まれているわけです。単なる入門ではなくてこれから学問をする学生たちに学問とはなんぞや科学のシステムはどう組み込まれているのか。それに対して私たち人間の学習意欲や文化的な欲求というものをどのように高めていくのかということについてこのリベラルアーツが教育課程に組まれているわけです。このリベラルアーツが大事な課程として認識され、今日に至っています。コメニウスという近代教育の父といわれた人がおります。私たちも教育論をお勉強するときに必ず出てくるコメニウスの教育論。このコメニウスは人間一生涯にわたりまして、まさに今の発達課題ですね。生涯にわたって7つの段階に分けまして、それぞれの教育課題を設けています。生涯にわたる年令段階を分析し、各段階に応じた学校の構想です。まず、誕生前の学校、幼年期の学校、少年期の学校、若年期の学校、青年期の学校、壮年期の学校、死の学校。この7段階。まさにこの時代に今日いわれている発達課題に沿ったところのベースがひかれているというふうに思われます。誕生前の学校。日本語でいうと胎教という言葉がございますし、今はいい音楽を聴いたり、いいお話を聞いたり運動をしたり、生まれてからではなくて、生まれる前からいい子を生むようにという心得がなされているようです。死の学校、日本でいうと高齢期の学

校ということになろうかと思います。こういったコメニウスがすでにこの時代に7段階の教育を展開しているわけです。ヨーロッパ社会の古典的な生涯教育論も跡付けたいのですが、ここは教育論の講義の場所ではございませんので、多少端折ってお話をさせていただきます。次に西欧ではなくて東洋においてはどうであろうか。中国とか日本においてどうであろうかというのをみてみますとこれもまた話題に事欠かず、たとえば論語の孔子の言葉がよく使われるところであります。孔子自身も自分をどう修業してきたかということで15才から70才まで皆さんもよく耳にされます「子曰く、吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に従へども矩を踰えず」といった言葉があるのもやはりそれぞれ人生の生涯の段階において何が大事か、どうなることが望ましいのかということを指し示しているのかと思います。これなども私どもも子どもの頃から孔子はこういったよといってよく話を聞いたものですし、またそれぞれ社会において社会人としても家庭人としてある場合にも、男の人も30にして立つというのだから、いよいよ立派な仕事をしてくれなくてはね、いよいよお父さんになったのだからという言葉がかけられるというわけです。40というと管理職になっている。そうすると40にして惑わずだよ、決断が大事だよ、係長さん、課長さん、となります。こういった中国での孔子の言葉、孔子だけではなくて儒教の中で生涯学習の教えがずっといわれていることというふうに思われます。『花伝書』これは有名な能の伝書ですが、世阿弥の書いたもので『風姿花伝』『花伝』といわれるものですが、能の道を極めていくためには子どもの頃からこのように修業し技を磨かなければならないと書かれたもので、これもやはり広い意味での生涯学習の教えだと思います。能役者の一生を7期に分けて各年齢層の修業の重点を説いています。「数え年7才からはじめ、子どものよさを活かし、自由にすすめてやらせるがよい。12、3の歳になると少年の声と姿とのよさを活かし、基礎的な業を正確に学ばせるがよい。17、8になると少年から青年へと生理的に変化する条件の悪い時期。体の無理をせず精神力で耐えるような修業をするように。24、5になると若さの盛りのよさを発揮するけれども一時的な花であるから気をつけてしっかりと稽古に励んだほうがよい。」というようなことであります。50有余となりますと無用なことはしないようにして、老木の花をみせる。こういった花伝書の中にも生涯教育の教えが人間の発達段階に応じて、きちんと位置付けられていたんだと思うわけですが、またいくつかの勧学文というのをみることができます。その中に「いうことなかれ。今日学ばずして明日ありと」という言葉もあるわけです。今日学ばないで明日があると思うな。その日その日こそ重要ですよ。というような勧学文などをいくつかみることができるわけです。子を養いて教えざるは父の過ちなり。訓導して厳ならざるは師の怠りなりということで、子どもを養うだけで学問を教えないのは父親として過ちである。師弟の訓導にあたって厳しさにかけるのは師として怠惰である。そういうような勧学文をみることができます。

さて、次に佐藤一斉著の『言志四録』がございます。佐藤一斉というのは1772年、つまり安永元年に生まれた人です。自らの人生の色々な教えの語録を書き綴ったものなんですが、もともとは儒学者です。有名な幕府の御学問所である昌平黌の儒官、つまり学長をした人なんです。この言志四録のなかに私ども

の生涯にわたる発達課題に関しての生涯教育がよく書かれている言葉が載っているわけです。「少にして学べば即ち壮にして為すあり。壮にして学べば即ち老いて衰えず。老いて学べば即ち死して朽ちず」という言葉なんです。これはまさに生涯教育論の東洋的な表現の最たるものではないかなというふうに思います。私もこの言葉をよくみることがありますが、なるほどなというふうに思います。これを読んだ人が、学ばざれば即ち老いて劣ろうということをいったり、老いて学べばいのち長し。こんな具合に洋の東西を問わず人間にとって生涯教育というのはそれぞれの時期に大切な課題でそういった教育やお勉強を心掛けなければいけないんだ、ということが人生の在り方として述べられていると思うのです。

生涯教育の今日的課題

次に生涯教育の今日的課題に入りたいと思います。この今日的な意味をもった生涯教育というのは必ずしも古典的な生涯教育論そのままではございません。人間の生き方、在り方、修業の仕方一般論ではなくて、それをベースにしておりますけれども、時代や社会の変化に基づいてその流れの中で、私たちにとって学校教育だけではなくて生涯教育というものが非常に大事であることを、個人の自覚においても、また、社会での教育の位置付けの問題にしても取り上げられるようになってきた問題だと思います。そこで今私が一番大事だと思うのは「インプット型からアウトプット型」へということです。そのことから先にお話しておきたいと思います。インプット型というのはどれだけ勉強したか、知識を詰め込んだか、あるいはどこの学校を出たか、そういったことを意味しているわけです。どれだけインプットされているか。知識や技能といったものが、学歴というものがどれだけインプットされているのか。ということからアウトプット型へ。つまりあなたは何ができるのかということが今問われている。実はごく最近発表されたものですが、㈶生命保険文化センターでは日本人の生活価値観調査というのを実施しています。この調査は継続されておりまして、76年、85年、そして91年。こういった流れの中で日本人の生活価値観の変化をみているわけです。これで面白いことをみました。それは生活の目標、あなたは生活の目標として何を大事にしていますかということなんですが、色々な項目の中で際立った変化を見せたものがいくつかありますが、今日のテーマで私が興味を持ちましたのは、「自分の能力を活かすためには転職や転業も考えたい」という項目です。転職・転業。これは何をここから引き出すかといいますと、自分が帰属している組織を大切にする、日本人ですと特にそうなんですけれども、一度勤めたらその職場にずっと長くいるほうが人間として信用がおかれるといった意識が強かった。日本人のサラリーマンとしての生活をみますとやはり年功序列型、賃金もそうですが、年功・年齢を経るにしたがってお給料があがるようになって、欧米型ですと職務職階級型。それに引き替え、日本ではひとつの仕事にレートとしてどれだけのお給料が設定されるかではなくてはり小刻みに年令をかさね、年功を経るにしたがってお給料が段々上がっていくような仕組みになっている。だから帰属組織に非常にこだわる、重点を置くという考えだと思います。やっぱり日本人はそうでございまして、履歴書にあんまりたくさん職歴がかかれると、喧嘩っぱやいのかなとか飽きっぽいのかなとかそういうふうに考えられた時代がずっと続いてきたわけです。私ども

の学校はその点、外国人の先生方がたくさん採用されます。履歴書を拝見しますと本当にたくさんの職歴が書かれているわけですね。職歴が変わる数が多いほどその方は色々と引抜きがあって、職歴が多いんだということになって、それは誇りなんですね。それだけ優秀な方だということになるわけです。ですから、帰属組織にこだわるかこだわらないかというのは、生活価値観というものをみる場合の一つのリトマス紙になるわけなんです。これが85年にはこの帰属組織にこだわらない、転業や転職を考えてもよいという人が40.5%いたんです。ところが91年の今回の調査では53.6%に増えました。85年、ちょっと前までですが、40.5%ですから6割の人はやはり帰属組織にこだわる人であったわけです。こだわらないという人は4割に過ぎなかった。ところが今や5割を越して、53.6%の人が帰属組織にこだわらない。つまり自分の能力を活かすためには転職や転業を考えるという人が85年と91年の間に13.1%も増えているという結果が出たわけです。これは自分がそう思っても社会や企業がそのように受け入れてくれなかったら、こういうことにはならなかったんじゃないかと思うんですね。一般には子どもの世代と親の世代を考えてみますと私も親ですけれども、やっぱり息子や娘がそのように自分の能力が活かせるんだからそろそろ転職がしたいなどというと、しかとした根拠があればそれもいいねといいますけれども、なかなかうんとはいわないと思います。やはりいままでお世話になったところが大事なのよということをいうと思うんです。最後まで反対するかどうかは分かりませんけれども、やはり最初に頭をかすめるのは、やはり今の職場を大事にしなさい、今の仕事を大事にしなさいということをやはり考えると思うんです。ところが今やそうでなくなってきたというのは、このインプット型よりアウトプット型です。あなたは何ができるのかということを求める企業が多くなった。職場が多くなったということではなかろうかと思います。その背景には全般的な労働力不足がありまして、新しい意欲に燃えた人を採用したい、この頃は今年もバブルが弾けたあとの経済の動きがよくありませんで、学校の就職などでも求人の枠が減って難渋しているところなんですけれども、ちょっと前までは売手市場、若い人たちも悠々と就職ができていたわけなんですね。そういった中で中途採用というのがずいぶん新聞に出ておりました。来年の春も新規卒業生を求人するだけでは足りなくて、もう7月とか8月に過年度におけるどこかに就職した人を引き抜くことが堂々とやられていたわけです。そういった場合には学歴とかだけではなくて、やはり意欲のある自分の会社にあった人を採用するというものであるわけです。このように時代が今までですと、今までの企業の考え方ですと、ともかくも朝会社に出てきて机の前にいつも座っている。この社員はこれはいつもコンピュータやパソコンでいえばオンの状態である。オンの状態であればこれは〝いい職員だ〟というふうに思われていたわけです。今まではオン人間だったわけですね。ですから会社には遅れず休まず、そしていつも机の前に座っている。仕事をしていればなおいいんですが、仕事をしなくてもともかく机の前に座っていればこれはオンの状態でいい職員だ、社員だということになっていたわけですが、しかし今は違う。そんなことだけではいい仕事をしているというふうには判断されない。むしろオン状態。付けっ放しの状態というのは能率が悪いというふうに考えるようになったということなんです。また、この人間のサイド、人物について考えてみましても、今までは何としても日

本の状態をベースにして考えてみましても、終戦直後からずっと望んでいたものは、成長です。経済がしかりですけれども、経済成長。グロース。伸びること成長すること。これに何よりも価値が置かれることであったわけですね。これはあまり変わっておりません。何としても成長率をのばしたいものだということで、成長率3.4%を切るのは大変だ、そうなると失業が出るとかですね。やはり成長率を中心に考えている経済なんですね。今朝の新聞にも公共事業費を前倒しにして予算を付ける。そうでないととても経済はもっていかないということなんですが、ともかくも成長至上主義。その成長に向けて人々は一生懸命学び、一生懸命働き心を一つにしてきたと思うんですね。いわばそういった企業型の人間というものに一つの鋳型が決められていた。ともかくも働く、成績を上げる。そして社員が心を一つにする。それは成長という一つの目的があったからなんですね。よくいうことがあるんですね。日本人というのは集団として本当によくまとまるし、それによって力が発揮される。これが日本人の勤勉さと結びついて経済成長を成功させたのだ。ところが、オンの状態であればそれでよしとするのではなく、今問題になっているのはそういった企業型人間から個人型、企業型の社会から個人型の社会に変わりつつある。変わってきている。みな、個性を発揮する、自分の能力を発揮する場がほしい。自己実現の場がほしい。こういった欲求に変わってきている。それは一つの目標、経済の成長とか豊かな生活というものが一つの壁にぶつかった。その目標を達成することができた。その後はただ物をもつ、お金や物ではなくて、もっと別なものを求めるようになってきた。自分でなければもてないもの、自分でなければ備わっていないもの。こういったものを求めるようになって、個人型の、個性型の社会に今変わってきている。あなたは今まで何を学びましたか、どんな学校を出ましたかで判断されるのではなくて、今あなたは何を望んでいるのですか。どんなことをしているのか、何をしているのかが問われるようになってきた。インプットからアウトプットへという変化の中で、私達自身がこの生涯教育の課題に向けて、自己啓発をしていかなければならない。自分がチャンスを求めていかなければならない。そういった課題が今あるのではないかと思うわけです。

これからの21世紀に向けて、今までの主役はどちらかといえば働き盛りの男性であった。今までの経済成長を支えていたのは、働き盛りの男性であった。それに引き替えて脇役というのは、これはまだ一人前になっていない青少年とか、あるいはどうしても家庭や地域で生活をする割合が高い女性、それから仕事をリタイヤしたシニアの方、高齢者の方ですね。そういった青年とか女性とか高齢者が今までは脇役であった。ところがこれからの時代というのはこの主役と脇役が全く入れ替わる。そういった時代になってきているんだということです。というのは、これからの社会というのは、企業が中心の企業社会、これが中心になる社会ではない。家庭とか地域、これが社会の中でウエイトが高い、大事な生活の場になる。経済の生活でもそうですし、文化の要求にしてもそうですし、また、人間が暮らしていくという意味においても家庭とか地域というのが、家庭社会・地域社会というのが、今までの会社・企業・職場に変わって大事なものになる。青年や婦人や高齢者がこれからの時代では主役になる。一つ例を取りますならばこれからの高齢化社会の中で、高齢化の問題を本当に解決していくのは企業社会が解決していけるだろうか。できないん

ですね。家庭や地域においてこそ、実現できる課題がたくさんあるわけです。今までは担い手が脇役の人たちが主役になる。これからの経済社会を支えていくのは今まで脇役の人であったということがいわれているわけですが、そうなりますとますます学歴で採用された社員ですとか何を勉強してきたかで採用されるところの企業人ではなくて、新しい問題に対してどんどん意欲的に取り組み、そして資質を兼ね備えたかたがたがこれから大事にされる、必要とされる社会になるわけで、私たちはそういった中でこれからおおいに生涯教育の時代に向けてお勉強していかなければいけない。それは古典的な生涯教育論の中で人生修業としてということだけではない。インプットからアウトプット型に変わった時代にふさわしい人間として自ら私たちを啓発していかなければならないという課題があるのではないか、というふうに思われるわけです。そういう意味におきましてこの先程の生命保険文化センターの調査からも日本人もこの短い間に刻々と価値観をかえつつあり、そしてそのことに対応するかのごとく社会も変わってきているんだということが、ここでいわれるというふうに思うわけです。

最初に私の主張点をお話させていただいたわけですが、しかし今日に至るまで生涯教育論が、先ほど申し上げましたようにこのまさに7月の末に文部省から生涯教育に関する答申案がでているわけですが、そういったものを理解するためにどんな流れの中でこの生涯教育論というものが展開されてきたかというのを少しご説明したいと思います。まさに2番目に書いてありますように教育機会拡充の教育政策としての生涯教育。教育機会拡充。教育を受けるということは最初から必ずしも平等ではなかったわけです。やはり教育を受けるためにはお金もかかる。あるいは時間がなければ教育が受けられない。勉強したいけれども働かなければ家族を養っていけないといった時代もずっとあったわけです。また、いろいろな社会的な不平等も人種的にあったりあるいは貧富の差などによってもあったし、そういった問題から教育界はこれから平等でなければならない。そういった公の教育として、生涯教育が考えられなければならない。ここから始まっているわけで、最初にフランス革命議会に提出された教育法案がございます。ここで、「公教育の全般的組織に関する報告書および法案」というのが正確な名称なんですが、ここにこういう言葉があります。教育は全ての年齢にわたって行なわれるべきである。現代の生涯教育論の源流をなすものがフランス革命時のこの教育の不平等を正すべきだという教育法案に盛られているものなのです。その全ての年令にわたってというのを先ほどお話したようにきちんと体系づけられてはおりませんけれども、理念として鮮明に打ち出されているわけです。これは第二次大戦後になってからおおいに展開してまいります。まず1965年の成人教育推進国際会議というのが開かれているわけですが、これはユネスコを中心にして行なわれたものです。ユネスコの成人教育部長を務めておりました、ポール・ラングラン、この人は生涯教育といえばラングランといわれる人です。ラングランが会議を推進したわけです。これが一つの大きな体系だといわれているわけです。こういった第二次大戦後の生涯教育の必要性・体系化というのは先ほど申し上げましたようにやはり社会経済の変化、文化の多様化というものが進む中で学校教育だけでは駄目なんだということがいわれまして、生涯教育論が主張されました。つまり人間の生きがい欲求とか自己実現欲求というものをいかに満たしていくかということに応える生涯教育

論でなければならないということです。しかし最初に申し上げましたようにやはり成長欲求に基づいたものです。社会発展のために、経済成長のために、あるいは物をもつために、お金をもつために人々は何をどう勉強しなければならないかという生涯教育論であったわけです。生きがいであり自己実現といいますけれども、やはり心を一つにしてというインプット型に基づいていたと思います。しかし、このラングランを中心にいたしまして、生涯教育論が展開された。それから次に OECD のリカレント教育です。リカレントというの循環するということがいわれておりますけれども、還流するとかあるいは回帰ということばが使われているわけですけれども、循環というのが適当な言葉ではないかと思います。この OECD の発表したリカレント教育というのはまあどちらかといえば、どの年齢層にわたってもということなんですが、労働重視、働くこと、仕事を続けること。教育と労働に重点が置かれているわけです。ですから職業教育。新しい技術革新にどう対応していくかというような課題がやはりここでポイントが置かれていると思います。それにしたがいまして、西欧諸国におきまして、ヨーロッパで企業の中で有給で教育休暇を制度として設けております。ペイド・エデュケーショナル・リーブ。お金を払って教育の休暇ですね。これを与えるというようなことが実際に行なわれているわけです。まあ、日本におきましても大学や大学院に社会人入学というのが進められております。私どもの学校でも社会人の方が入学しておいでです。どうぞ皆さんもこれをご縁にして社会人入学されませんか？私どもも若い子ばかりではなくて皆さんのように人生経験もふまえ大変立派な方が社会人として入学してこられますと教壇に立っても若い人と違った真剣な目で臨まれるので私どもも緊張するんですね。講義が皆様方に訴えられているかな、大丈夫かなと思うときに若い子よりも社会人の学生のほうに目が行くんです。そうするとじっと見つめられていると、あっ、関心を持って聞いてくれているなと思うんです。そんなことで社会人入学ということが進められたのは、そういったリカレント教育論の一つの流れだろうというふうに思うわけです。このように今日的な課題に基づいたところの生涯教育は戦後このように発展してきております。

さて、４番目のわが国における生涯教育政策です。1971年、昭和46年ですが、社会教育についての答申が一つ出ております。正式には社会教育審議会答申。そして1981年に中央教育審議会の答申。これは社会教育から一歩進んで、生涯教育の答申がなされております。また、臨教審。85年から87年に展開されました臨教審。この臨教審において生涯学習体系への移行答申というのがなされております。そして先ほどお話いたしましたように1992年に生涯学習審議会答申というのが出ているわけです。生涯学習についての生涯教育が生涯学習かという言葉の使い分けを難しくいうのもありますけれども、そんなに厳密でなくてもよろしいかと思いますが、しかしこの頃では各市町村におきまして、生涯教育よりも生涯学習という言葉を使っておいでのようです。生涯学習宣言都市ということで宣言をしておられる都市が増えてまいりました。この間も釧路市で生涯学習元年と打ち出しておられましたが、釧路市では11階建ての生涯学習センターというのをこの11月にオープンする予定です。愛称が付けられておりまして、「まなぼっと」とあります。立派な公民館を改造して11階建てのまなぼっとができております。そこで実は私どもの北星女子短大がこの皆さんに計画しました講座を全部ではありま

せんけれども、この11月28日に釧路市のまなぼっとのオープン事業として私どもがそこで講座をいたすことになっているわけです。私どもは全道に広がってエクステンション・プログラムということでこういった生涯教育の地域展開をはかいたい。札幌だけではなくて全道から学生が集まってきているわけなんですけれども、その道民の皆さんに私どもが少しでもお役に立てばということで計画したのが釧路市が今年最初というのは生涯学習ということを各市町村において非常に大事にするようになってきたということでございまして、ますますそういう気運が高まってきて、It's never too late. という言葉があちこちで囁かれるようになるのではないかなというふうに期待しているわけです。

人生と発達課題

さて、時間が残り少なくなってまいりました。5番目の人生の発達課題。これが私のテーマであったわけなんですけれど、この発達課題につきましてはR. J. ハビーガーストの発達課題というのが基本になっております。これは胎児期、乳幼児期、児童期、思春期、中年期、老年期の6つの期となっております。細かいことは抜きにいたしますけれども、ここに書いてあるのはルソーの言葉です。「人間の教育は誕生とともに始まる」。話をする前に、人のいうことを聞き分ける前に、人間はすでに学びはじめる。ルソーの言葉なんですね。誕生とともに始まる。しかしこのハビーガーストは胎児期から教育は始まるんだということをいっているわけです。私どもは人生の各期においてそれぞれの発達課題に応じた教育のシステムが組まれていかなければならないわけで、現実に色々な答申とか施策をみますと、それぞれの発達段階に応じて、このハビーガーストの発達段階に応じて施策として何が必要か。学習内容、学習主題から始まって、学習内容、施策の推進の方向。これなどはいわゆる社会教育の担当の方だとか社会教育主事の方がこういったことのプログラムを組まれるわけです。それぞれ発達課題に基づいたシステムが展開されているということでございます。ともかくも私どもこういった生涯教育論というものが単なる理念ではなくて現実に理論化され、体系化されて今日的な課題をふまえて位置付けられているわけでございますけれども、先ほどお話いたしましたように〝学ぶに時なし〟、また言志四録に〝少にして学べば壮にして則ち為すあり〟、というそういった言葉を思い出すときに、やはりお勉強をする、学ぶということに時はないんだ。始まりは今。何かを始めようとしたら始まりは今なんだ。けして過去にあったわけではない。悔やむこともない。ここにひとつ私は詩を書いておいたんですが、これはマッカーサー元帥が座右の銘としていたものといわれているものです。若さ－Youth サミエル・ウルマンという人の詩なんですけれども、「Youth is not a time of life. It is a state of mind. As young as you hope, as old as your depair.」これは訳がありまして、「若さとは人生の一時をいうのではない。それは心の状態をいうのだ…」。よく使われるんですね。たくましい意志、すぐれた創造力、燃える情熱、怯懦。恐れを乗り越える勇猛心、安逸を振り切って立ち向かう意欲。こういう心の状態を若さというのだ。人は信念とともに若く、疑惑とともに老いる。人は自信とともに若く、恐怖とともに老いる。希望あるかぎり若く、失望とともに老い朽ちる。ああ、もう遅いとか、駄目なんだとか、私なんてなどということは益々老い朽ちることを早めるばかりだ。やはり希望を持つことが大事であ

る。疑惑と恐怖に恐れおののくのではなくて、疑惑をもったり恐怖を道連れにするのではなくて、信念をもち自信を持つということが大事なんだ。ということをこの詩は教えてくれるのだと思うんです。まさにこの人生の発達課題。事細かに設定されたものはありますけれども、その気持ちをもつことが発達課題の全体の中でいえることではないかなというふうに思います。

さて結びにかえてのこれからの課題ですが、"コンテンジェンシーの時代に向けて"。コンテンジェンシーというのはこれは何が起きるか分からない不測の時代ということをいいます。不測の状態。何が起きるか分からない。不測の事態。これをいうわけです。これからの時代というのは共通の言葉で言い表わすと私は不測の時代、何が起きるか分からない。こういった時代だと思います。変化が激しいというよりも、たとえば東西の壁が破られるなんて思いませんでしたね。こういった状態をみますとこれからどうなるのか。一時は未来学などというのが流行りましたけれども、しかし竹村健一がいくら御託宣をしてもけしてこれからの経済も社会も文化も語ることはできないのじゃないか。しかし私達はその時代に向けて恐れおののいてはいけない。やはり何が起ころうとも自分が強くなければならない。そのためにいつも学ぶ姿勢を整えて、そのチャンスを探し求めてなければならない。ということがいわれるのじゃないかと思うんです。しかしそれは単に気構えだけではなくて、生涯時間70万時間時代にどう生きるか。もうすでに一生を通していうと人生80年時代で、70万時間という時間を私どもは与えられているわけです。あとでお話したいと思いますけれども、この70万時間の割りふりをしてみますと、働く時間よりも自由時間、余暇時間の方が上回っています。自由時間というものが私たちに17万から20万時間与えられているんです。そういった状況にもうあるわけで、私どもは働いてるときが善であり、働いていること生きがいという時代はおわっているわけです。怠けることではなくて自分に与えられて時間をどう活かしていくか。フランスでは自由時間省という省ができておりまして、遊び心はクリエイティブという言葉が口ずさまれているわけです。遊び心はクリエイティブ。自由時間をどう活かしていくか。これが私どもが自分にどう生きがいを与えるか。自分を自己発見していくか。そして創造性豊かな生き方ができるか。その決め手になるのであって、決して何を勉強し、どんな学校を出たか、どんな会社に就職をしたか、そういったインプット型では変わらない。新しい方向に向けて今変わってきている。この遊び心はクリエイティブという私どもはより広がった生き方と生活をどう展開していくかということだろうと思います。皆様方はこういった公開講座に、この暑い中を貴重なお時間を割いておいでいただいたことはもう皆様はクリエイティブに生きていらっしゃる方々なわけです。